大分合同新聞
ワークシート

ウミガメを放流

年	組	名前

東京大学空間情報科学研究センターなどは、佐伯市米水津の間越海岸で、アカウミガメに発信機を付けて放流しました。

屋久島に上陸した雌 → 佐伯・間越海岸から放流

ウミガメ どこで産卵する？

東京大学空間情報科学研究センターなどは4日夜、佐伯市米水津の間越（はざこ）海岸で、アカウミガメに発信機を付けて放流した。産卵行動の解明などが目的。今後、6カ月から1年かけて行動を見守り、生態を知る材料とする。

海に帰るアカウミガメを見守る地域住民ら＝4日夜、佐伯市米水津間越の「はざこネイチャーセンター」

東大が発信機

「母浜回帰説」検証へ

ウミガメは地球上の磁気を感知して居場所が分かる能力があり、雌は同じ浜で産卵することが知られている。生まれた砂浜に帰ると、産卵地によってはほとんど雌が生まれない場所の存在が判明。他の浜で生まれた個体が来て産卵するということになる。そのため、産卵地への固執は過去に産卵に成功した経験によって生じる可能性があると考えられているという。

今回の研究は国と鹿児島県の許可を得て実施。産卵のため3日夜に屋久島（鹿児島県）の砂浜に上陸したアカウミガメ2匹を産卵前に捕獲し、フェリーやトラックで間越まで運び、発信機を付けて4日夜に放流した。過去に屋久島で産卵した全てのカメに標識が付けられており、捕獲した1匹は初上陸したもので、もう1匹は屋久島での産卵経験がある個体を選んだ。

アカウミガメは5～8月に3～5回ほどの産卵をする。今後、発信機から衛星を通じて送られてくる位置や深度の情報を解析し、屋久島に戻って産卵するかなどを調べ、産卵地の固執性などの検証に使う。

間越にウミガメの生態を学ぶことのできる施設「はざこネイチャーセンター」を開設しているNPO法人おおいた環境保全フォーラムの内田桂代表(62)は「世界的に進めているウミガメ保護の活動に大分から参加できるのは素晴らしい。生態を解明し、どうやって保護につなげるのか一緒に考えたい」、東大空間情報科学研究センターの工藤宏美研究員は「間越には人と環境がそろっている。今後も一緒に研究していきたい」と話した。

（2015年6月6日朝刊16面）

①ウミガメの居場所が分かる能力は、何を感知しているのでしょう。

……

……

……

……

②「母浜回帰説」とは、どのような考えでしょう。

……

……

……

……

③２匹とも屋久島に帰ったら、どういう推測ができますか。考えてみよう。

……

……

……

……